次期学習指導要領 教科別まとめ　高校 No.12

高校版

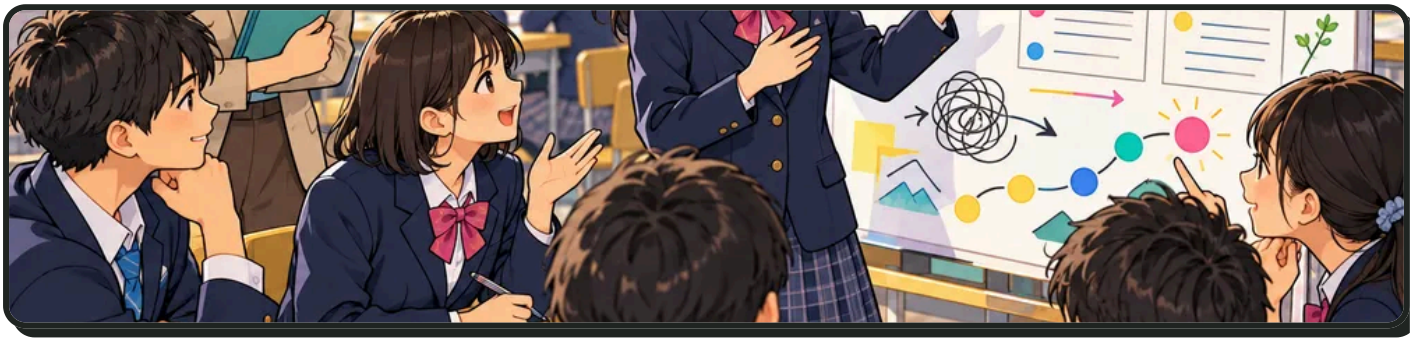
審議まとめ（2026年10月5日）を高校の先生向けにまとめ直しました

総合的な探究の時間

次期学習指導要領で、どう変わる？

小中も「総合的な探究の時間」へ。一人一人の探究を深める





10秒でいうと　名称は現行どおり。自分の在り方生き方に関わる「マイ探究」を自分で進められる姿を目指す

やさしく言うと

高校の「総合的な探究の時間」は、名前は今のままです。
標準単位数は、新しい単位の数え方で6〜12とする案です（今は3〜6単位）。高校段階では、自分の在り方生き方に関わる「マイ探究」を、自分で進められるようになることを目指すとされています。また、高校の道徳教育で在り方生き方を考える中心的な場面に、総合を加える方向です。

高校はいつから？

全面実施	2032年度の入学生から（学年ごとに。2034年度に全学年）（見込み）
移行期間	2029〜2031年度
告示	2027年度末の予定
教科書	2032年度から学年ごとに新しい教科書（2030年度から検定）

この冊子の中身

1 総合的な探究の時間のポイント　4つ
2 主な変更点　8項目
3 現行と次期の比較（新旧対照）　7項目
4 高校の科目と単位
5 授業時数
6 生成AI・ICTとの付き合い方　5項目
7 今からできる準備チェックリスト　7項目
8 次期を先取りする授業アイデア　1本
9 現行の学習指導要領・解説（高校）

無料 原田英語.com 次期学習指導要領ナビ
研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。クレジットは残してください。
審議まとめ（2026年10月5日）準拠・出典ページつき。告示前の方向性で、今後変わることがあります。2026年11月4日 版
サイトで見る

総合的な学習の時間／総合的な探究の時間の3行要約（全校種）

1. 小中学校の「総合的な学習の時間」も「総合的な探究の時間」に名前を変え、小学校から高校まで同じ名前・一貫した目標にすることが適当とされた。
2. 小学校の総合は「探究の領域」と新しい「情報の領域」の2つで構成し、情報の領域はミニ探究ユニットと情報ブロックで学ぶ方向が示された。
3. クラス共通の「テーマ探究」と一人一人の「マイ探究」を組み合わせ、学校行事との代替ルールや計画・評価の書き方もはっきり・シンプルにする方向。

1 総合的な探究の時間のポイント

4つ

1 自分で進める「マイ探究」をめざす

高校段階で、自分の在り方生き方に関わる「マイ探究」を自律的に進められるようになることを目指すとされています。そのためには、小中から「テーマ探究」と「マイ探究」の両方を経験することが大切です。先生が任せきりにせず、見取りや形成的な評価で関わる役割も解説で示す方向です。P323

授業では、たとえば たとえば1年でテーマ探究の進め方を学び、2・3年で一人一人が自分の問いを立てて探究するという3年間の流れが考えられます。

2 在り方生き方を考える「中核的な指導の場面」に

高校の道徳教育では、公民科（公共、倫理）と特別活動が、人間としての在り方生き方を考える中心的な場面とされています。ここに総合を新しく加える方向です。ただし、総合の中で道徳教育のための時間を別にとる必要はないとされています。P305

授業では、たとえば たとえば探究の振り返りで、「この探究を通して自分は何を大切にしたいと思ったか」を書く時間を設けることが考えられます。

3 卒業前の「節目としての探究」

最終学年などで「節目としての探究」を位置付けることが望ましいとされています。学習の成果や自分の変化を実感するための探究です。卒業研究のようなものです。ただし、細かな条件を国が決めることはしない方向です。P325

授業では、たとえば たとえば3年生で、それまでの探究を論文や発表にまとめ、後輩や地域の人に聞いてもらう場をつくることが考えられます。

4 総合は教育課程の「出島」

総合は学校の裁量が大きく、教科の壁や、学校と社会の壁をこえる「出島」のような役割が期待されています。地域の人や団体、企業などと連携し、質の高い探究を進める方向です。外部の人の関わり方や、つなぎ役の体制についての考え方も示すとされています。P320 P338

授業では、たとえば たとえば地域の企業や大学に協力を頼み、生徒の問いに合わせて専門家から助言をもらえる仕組みを作ることが考えられます。

2 主な変更点

8項目

1. 学校行事を総合で代わりに行えるかのルールを明確にする方向

総合の時間を学校行事に充てられるかは、総合と特別活動の両方の目標・内容に照らして、実際の学習の中身で判断するとされました。「儀式的行事」と、「文化的行事」「健康安全・体育的行事」の準備（学習発表会を除く）は、原則として総合で代替しないとされています。修学旅行などの「旅行（遠足）・集団宿泊的行事」や職場体験などの「勤労生産・奉仕的行事」は、探究として成り立つ部分だけ代替できるとされています。総合の本来の趣旨と離れた活動に時数が使われている例があるため、とくに中学校向けに、修学旅行や職場体験を質の高い探究として行う事例を示すとされました。 P336

2. クラス共通の「テーマ探究」と一人一人の「マイ探究」を組み合わせる

先生が学年・学級で共通のテーマを決める「テーマ探究」と、子供一人一人の「好き」や「得意」を起点にする「マイ探究」をバランスよく組み合わせる方向です。目指すのは、高校段階で自分の在り方生き方に関わるマイ探究を自分で進められるようになることです。「1年間1テーマ」だけでなく、1年に複数テーマを時期を分けて行う、両方を並行して行うなど、年間指導計画の参考例を示すとされました。マイ探究は「子供に任せればよい」という意味ではなく、先生の見取りや指導の役割も解説で示すとされています。

P322 P323

3. 成果を「外化」する機会と、「節目としての探究」

テーマ探究・マイ探究のどちらでも、探究の成果を論述・レポート・プレゼン・作品制作などで表す（外化する）機会を適切に設けることが、学習指導要領で明確化する方向です。外化を通して言語能力や情報活用能力が育ち、各教科の学びにもつながるという考え方です。また、各学校段階の最終学年などで、学びの成果や自分の変化を実感する「節目としての探究」を位置付けることが望ましいとされます。細かな要件は国は求めず、幅広い事例を参考資料で示し、探究の成果物のアーカイブなど学校図書館との連携の仕方も示すとされています。

P323 P325

4. 全体計画・評価をシンプルにし、目標は学校の「基本的な方針」とも結ぶ

これまで例示されていた「3観点を10の要素に分けた評価規準を単元ごとに作る」やり方は負担が大きいとして見直し、目標に照らした評価の視点例を5要素程度で示す方向です。細かな評価場面の設定や評価材料の集めすぎは求めず、先生の形成的評価（その場でのフィードバックや支援）と、子供の自己評価（振り返り）・相互評価の機会を一層重視するとされました。全体計画には育てたい資質・能力を短く書き、「学習活動・指導方法・指導体制・評価」は単元計画に書けばよく、全体計画への記載は必須としない方向です。総合の目標・内容は、学校教育目標だけでなく校長が作る学校運営の「基本的な方針」とも関連を図り、学校の目標を決める視点として「重点化」（重視する要素をしぼる）と「付加」（指導要領にない要素を加える）を示すとされました。 P333 P334 P335

5. 探究のとらえ方を整理し、「研究系・行動系・創作系」を示す方向

探究は「興味・関心や問題意識に基づき課題を設定し、知識や方略を使い、試行錯誤しながら新たな価値の創造を繰り返す学習のプロセス」と分かりやすく言い直すとされました。「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の4つの流れは典型例であって、順に回すこと自体を目的にしないと明確化し、「振り返り」は各コマや一定のまとまりごとなど様々な場面で随時行うものとして、4つの流れに並ぶ独立した一段階には位置付けない方向です（振り返りを軽く見るという意味ではなく、自己評価としての振り返りは一層重視されます）。課題に注目した探究の形として「研究系」「行動系」「創作系」があり、形によって進め方が違うことを参考資料で示すとされました。AI時代に作品を作り上げる経験が大切だとして、「創作系」も推進するとされています。

P321 P324 P325

6. 情報技術を積極的に使い、AIは「偽の熟達」に注意

総合では、体験が土台であることを前提に、小中高を通じて教育課程全体の中でもとくに積極的に情報技術を使うことが求められると明確化すべきとされました。そのため中学校の情報・技術科、高校の情報科など情報活用能力を育てる「要」の教科ととくに緊密に連携するとされています。AIを使う場合は、一見高度に見えても力が育っていない「偽の熟達」に注意し、元の情報を確かめること、試行錯誤の記録、その場で説明して質問に答えること、現場体験や実験などAIに代わりにくい経験を重視することが考えられるとされます。具体的な使い方はガイドライン等で示される予定です。

P328 P330

7. 各教科・道徳・特別活動との役割分担を整理する

総合は、各教科で得た学びを「道具」として使い、自分にとって切実な課題に挑む「試合」の場と位置付けるとされました。学習者が課題・プロセス・成果のすべてを自分で決められるもの（パターン4）を「探究」、一部を決められるものを「探究的な学び」と整理し、各教科は探究的な学び、総合は探究を担いつつ互いに行き来すると整理されています。道徳は「学びを方向付ける人間性」、総合は「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」、特別活動は「他者との対話や協働」を育てることに向く、と整理されます。キャリア教育は特別活動が「要」、総合は実社会との関わりの中で探究を通して実践する場とされ、学校行事の「文化的行事」は学習発表会の要素を加えた「文化・学習発表的行事（仮称）」に改める案です。 P320 P325 P326 P327 P337

8. 「社会との連携」を進める（総合は教育課程の「出島」）

総合は学校の裁量が大きく、教科や学校と社会の壁を越える教育課程上の「出島」として、地域・企業・大学などとの連携が期待されます。社会側の関わり方は「出会い」「伴走」「協働」の3段階程度のイメージで示すとされ、コーディネーターや社会教育士の活用、費用の工夫の事例も紹介するとされています。子供が外部に協力を頼むときは、事前に自分で下調べし、相手の時間や立場を尊重するといった注意点を指導することが必要とされます。また新しい「裁量的な時間」でマイ探究を深掘りする場合は、総合との役割分担や連携を図ることを明確化するとされました。 P335 P338 P339 P340 P342

3 現行と次期の比較（新旧対照）

7項目

黄色のマーカー＝次期で新しく入る・強く打ち出される言葉　~~取り消し線~~＝現行から消える・言い方が変わる言葉

項目	現行	次期（審議まとめの方向）
名称	小中学校は「総合的な学習の時間」、高校は「総合的な探究の時間」	**小学校から高校まで一貫して「総合的な探究の時間」**とすることが適当とされた P343
探究の質を考える視点	「高度化」（整合性・効果性・鋭角性・広角性の4要素）と「自律化」（自己課題・運用・社会参画の3要素）で示され、分かりにくいとの指摘がある	「**課題の質**」「**プロセスの質**」「**成果の質**」の3つの視点に整理して参考資料等で示す P321
探究のプロセス	平成20年改訂の「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」の4つの流れ。順に回すこと自体が目的化している例がある	4つの流れは**典型的な姿の一例**とし、課題の設定を強調。「振り返り」は様々な場面で随時行うものとし、プロセスの独立した一段階には位置付けない。課題によって「**研究系**」「**行動系**」「**創作系**」で進め方が違うことを示す P324
評価規準のつくり方	3観点を10の要素（視点）に分けた詳しい評価規準を単元ごとに作る扱いが例示され、細かな評価場面や評価材料集めが必要になっている（指導要録には身に付いた力を文章で端的に記述）	文章で記述する基本は維持しつつ、評価の視点例を**5要素程度**に絞る。細かな評価場面の設定は求めず、**形成的評価**と**自己評価・相互評価**を一層重視 P333 P335
総合で学校行事を代替できる範囲	代替できる例として修学旅行等の「旅行（遠足）・集団宿泊的行事」と職場体験等の「勤労生産・奉仕的行事」、できない例として「文化的行事」「健康安全・体育的行事」の準備が挙げられるが、解説に曖昧さが残る	両方の目標・内容に照らした**学習の実態で判断**。「**儀式的行事**」と、文化的行事・健康安全・体育的行事の準備（学習発表会を除く）は**原則**代替しない。旅行・勤労生産の行事は**探究として成り立つ部分**だけ代替可能 P336
総合の目標を決めるよりどころ	各学校の総合の目標は学校教育目標との関連を図る	学校教育目標に加えて、校長が作る学校運営の「**基本的な方針**」とも関連を図る。目標を定める視点として「**重点化**」「**付加**」を示す P334
考えるための技法	比較する・分類する・関連付けるなど10個の例が並べて示されているだけで、考えを広げる（発散）思考が含まれていない	当面「**発散**」の観点を加え、「**発散と収束**」の観点から分類して示す。学習方略とともに使いやすく具体化 P337 P338

4 高校の科目と単位

高校はもともと「総合的な探究の時間」で名称は変わらない。標準単位数は現行3～6単位が、新しい単位の数え方（1単位=17コマ）で6～12新単位とする案が示されている（P80・P82）。高校段階で、自分の在り方生き方に関わる「マイ探究」を自分で進められるようになることが目指される（P323）。高校の総則にある「人間としての在り方生き方に関する中核的な指導の場面」に、特別活動・公民科（公共、倫理）に加えて総合を新たに位置付ける方向だが、道徳教育のために別に時間をかける必要はない（P327）。学校設定科目と総合的な探究の時間を組み合わせるなど、科目の柔軟な組替えの例も示されている（P43）。

5 授業時数

小学校の総合では「探究の領域」と「情報の領域」がそれぞれ別に標準授業時数を設定する方向。情報の領域に必要な時数は各学年最大で、小3・小4が30コマ程度、小5・小6が35コマ程度と見込まれている（P78）。この増えた分は年間の総授業時数を増やさずに、標準時数が35コマ以下の教科等を除いた教科等から一律3～4%程度を「広く薄く」減らして確保する考え方で、具体的な数は今後示される（P79）。情報の領域は全面実施（小学校は令和12年度）を待たず、令和10年度から段階的に先行実施する経過措置が適当とされている（P79）。また、新しい調整授業時数制度では総合も調整の対象になる（ただし35コマ未満に減らすことはできない）（P32）。高校は標準単位数3～6単位→6～12新単位（P82）。

6 生成AI・ICTとの付き合い方

5項目

1. AIが答えを出す時代の「探究」の意義
AIは人間の知的活動のあり方を含め、社会を構造的に変えつつあります。AIが簡単に情報を示す時代に、判断や人生の主導権を持ち続けるためにも、批判的に情報と向き合い、真偽や意味を問い直す力が一層重要とされています。 P319

2. AIやネットの切り貼りで終わる「調べ学習」の課題
ネット上の情報やAI要約を切り貼りするだけの「調べ学習」に終わる例が見られることが課題とされています。 P76

3. 「創作系」の探究：AIに操られずクリエイターに
AIなどデジタル技術で、だれでもアイデアを作品にできるようになりました（デジタル技術の民主化）。一方、おすすめされ続けるコンテンツを消費し続ける誘因も増えています。AIに操られず人生を舵取りするため、作品を作り上げる「創作者」としての経験を重ねる「創作系」の探究を進めます。 P324 資料編(3)P103

4. 総合におけるAIの取扱い
AIは効果的に使える一方、高度に見えても実際は力が育っていない「偽の熟達」のおそれや、認知的負荷の低下・記憶や理解の弱化・批判的思考の低下などの負の影響も議論されています。AIは「仮説を立てる」「論じる」など高度な認知も代わりにできる点が特徴だという指摘もあります。 P330 資料編(3)P117

5. AIを使うときに重視すること
AIで得た情報の元になった一次情報（発信者・時期・妥当性）を確かめることに加え、試行錯誤の過程、口頭での説明（その場で説明し質問に答える）、AIに代わりにくい現場体験・協働・実験・観察、AIを使う中で自分の成長を自覚すること、を重視する対応が考えられています。発達段階に応じたAI活用のあり方は、ガイドライン等で示す必要があるとされています。 P330

7 今からできる準備チェックリスト

7項目

- [ ] 今すぐ 年間指導計画で、学年共通の「テーマ探究」と一人一人の「マイ探究」がどう配置されているかを確かめ、「1年間1テーマ」以外の組み方（時期を分ける、両方を並行する）も検討します。 P322 P323

- [ ] 今すぐ 探究でAIを使うときの約束を決めます。もとの一次情報（発信者・時期・妥当性）を確かめる、試行錯誤を記録する、その場で説明して質問に答える、AIに代わりにくい体験を大切にする、の4点が手がかりになります。あわせて安全面の約束として、学校・教育委員会が認めたサービスを使い、最新の年齢制限・利用規約と保護者同意の要否を確認する、氏名・写真などの個人情報を入力しない、教師の指導監督下で使う、の3点も必ず加えます。 P330

- [ ] 今すぐ 単元ごとに3観点を10要素に分けた評価規準を作るやり方を見直す方向をふまえ、細かな評価場面を増やすより、見取りにもとづく声かけ（形成的評価）と、子供の振り返り・相互評価の時間を確保します。 P333 P335

- [ ] 告示まで 総合の時数を学校行事に充てている部分を洗い出します。儀式的行事や、文化的行事・健康安全・体育的行事の準備（学習発表会を除く）は原則として代替しない方向なので、修学旅行や職場体験は探究として成り立つ部分を明確にします。 P336

- [ ] 告示まで 全体計画を見直し、育成を目指す資質・能力を端的に書く形に整理します。学習活動・指導方法・指導体制・評価は単元計画に書く方向です。目標は学校教育目標に加え、校長が作る「基本的な方針」とも関連付け、「重点化」「付加」の視点で検討します。 P334 P335

- [ ] 先行実施まで 地域・企業・大学などとの連携を「出会い」「伴走」「協働」の3段階で整理し、子供が外部に協力を頼むときの事前の下調べや、相手の時間・立場を尊重する指導を計画に入れます。 P339 P342

- [ ] 全面実施まで 最終学年などで学びの成果や自分の変化を実感する「節目としての探究」をどう位置付けるかを検討し、成果物のアーカイブを含めて学校図書館との連携を相談します。 P325

8 次期を先取りする授業アイデア

1本

高校2年　1単位時間（50分）

マイ探究の中間レビュー会

試行錯誤の記録をもとに、その場で説明し質問に答える場をつくります

手順・ワークシート

ねらい

自分のマイ探究の現在地を、試行錯誤の記録をもとに口頭で説明し、他者からの質問を受けて次の一歩を決める。

流れ

- 5分 ねらいと進め方を説明します。「完成品の発表ではなく、途中経過を説明して質問をもらう場」であることを確認します。
- 5分 各自が中間レビューカードに記入します。自分の探究が研究系・行動系・創作系のどれに近いかも書きます。
- 30分 4人グループで1人7分程度ずつ（説明2分→質問4分→記録1分）。スライドは使わず探究ログを見せながら口頭で説明し、聞き手は「その根拠はどこから？」「次に何を試す？」などと質問します。
- 10分 もらった質問をもとに、次の2週間で試すことを1つ決めてカードと探究ログに書きます。

評価

説明の上手さではなく、自分の言葉で根拠や試行錯誤の過程を説明できているか、質問を受けて次の行動を決めているかを見取り、その場でフィードバックします。課題の質・プロセスの質・成果の質の3つの視点を参考にし、細かな評価場面を設けず、探究の過程を通じて継続的に見取ります。

9 現行の学習指導要領・解説（高校）

PDF **高等学校学習指導要領（平成30年告示）（本文）**
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf

PDF **高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編**
https://www.mext.go.jp/content/20260115-mxt_kyoiku01_2_9.pdf

文部科学省の公式PDFです（クリックで開けます）。

ご利用について

- **研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。**
  （校内研修・教育委員会の研修・教員養成の授業・学年会・PTAなど）
- クレジット「原田英語.com 次期学習指導要領ナビ」
  （https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）はそのまま残してください。
  各ページの下に入っています。
- 中身は中央教育審議会 教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」（2026年10月5日）ほか文部科学省の資料をもとに、原田英語.comが要約したものです。**告示前の方向性**で、答申・告示で変わることがあります。（仮称）の名前も今後変わる可能性があります。
- 文中の P〇 は審議まとめ本体（PDF）のページ、**資料編（1）～（3）P〇** は第3部 資料編（PDF）のページです（PDFのページ番号。印刷されたページ番号とは1つずれることがあります）。PDFで見ているときはクリックで原文が開きます。
- 授業アイデア・指導案は、審議まとめの方向性をふまえた原田英語.comのオリジナルの試案です。
- 最新の情報・ほかのPDFはサイトで：
  https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/download/（2026年11月4日 版）

サイトで最新版を見る